



第五十回研究大会兵庫大会実行委員長  
(兵庫県立長田高等学校長)

小山 智久

あらためまして、おはようございます。兵庫県では、先月までノーネクタイ、上着の着用を必ずしも必要としないというエコスタイルでやっておりますが、まるでそのような今日の冷え込みで、全国的に今年一番の冷え込みだそうでございます。

スポーツの秋、芸術の秋ということで、さまざまな学校行事が予定され、今年度の指導計画もいよいよ佳境を迎えるこの十一月に、平成二十九年度の全国連の研究大会、そして、本県の国語部会の秋季研究協議会開催のご案内を差し上げましたところ、多忙な日程を各自調整いただき、本日は六百人を超える方々のご参加をいただいております。本当にお礼申し上げます。

さて、先ほど佐藤会長の方からお話ございましたが、兵庫県は今回五回目の開催となります。

そしてこの度は、高等学校の国語科の教員が教科指導について研鑽を積むために自主的に立ち上げました全国連にとりましては五十年目、そして兵庫県の国語部会にとりましては七十年目の一つの節目の年を迎えております。それぞれの団体が活動を開始しました戦後間もない頃、そして高度経済成長が盛んだった頃は、いろいろな意味での変化の大きい時代でしたが、時代の変化の激しさ、スピードは、かつての時代を凌駕するものと認識しております。

これまで特に戦後からおよそ七十年間の学習指導要領の変遷は、一言で言えば生活中心から学問的な系統性へ比重を移していく、知識の内容を増やしていく、そういった連続的な過程であつたととらえることができます。現代の教育を取り巻く環境の変化から見ますと、スパート・シヨックの後の昭和四十年台半ばの改訂以降の「教育の現代化」は既に過去のものになっているのではないかという気がします。

かつて教員は、学校教育では「既知の伝達」を生業としていました。しかし、

いつでも、どこでも、だれでもが、スマートフォンなどの携帯端末によって、知らないことにであつた時にその場で簡単に調べることができる今日、つまり知識基盤社会、生涯学習社会といわれる現代では、そういった知識の陳腐化が加速している時代だと思います。知識の量が力ではなくなりました。このような時代の進展の中では、学校教育に求められる機能も大きな転換が必要とされています。教育への期待が大きくなっている所以だとも思います。これからは、一人ひとりが自ら情報を獲得するスキル、そして手に入れた情報をもとに一人ひとりが「思考し、判断し、主体的に学ぶ力」を育成することが求められておりますし、また「他者との対話を通して学びを深め、正解のない課題に対しても、お互いの納得解を得る力」、そういった力を獲得していくことが必要だと考えます。まさに「知識を教える」のではなく、「資質能力を育てる」ことが大切になってまいります。

本大会の要項の裏面をご覧ください。裏表紙には兵庫県の地図がございますが、兵庫県はかつて五つの国から出来上がった、多様な県でございます。多様性の国、そして先ほどの龍獅團の舞ではございませんが、海外からの新しい知恵、知識、文化を積極的に取り入れる、そういった気風のある県でございます。このたびの「アクティブ・ラーニング」という新しい取組につきましても、いささか前のめりな感はありませんが、積極的に取り組もうとしていらっしゃるでございます。実行委員会を立ち上げました時に、最初に出てきた「ところで、先生の学びはアクティブ・ラーニングになっていますか。」という問いかけから、本大会の準備はスタートいたしました。

本日は、文部科学省の大滝一登視学官をお迎えし、今まさに改訂の作業が進められている学習指導要領のエッセンスである「主体的・対話的で深い学び」の視点からの高校の国語の授業改善についてご指導いただきます。そして、午後からは、多彩な講師陣から提供されます言葉や表現に対する素材をもとに、そして明日は、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、これまで兵庫県の教員が挑戦してまいりました、玉石混交ではありますが、その取組を発表、報告いたしました。それをもとに、参加者の皆様同士の対話を通して、本研究大会が深い学びの機会となることを期待しております。

最後になりましたが、早朝より本大会に華を添えていただきましたご来賓の皆様、どうもありがとうございます。この大会の後、ご参加の皆様がお帰りになつてからその実践に少しでも勢いがつくような大会になることを期待いたしますとともに、本大会の実行委員会を代表してご参会の皆様への感謝と歓迎の気持ちを込めまして、開会のご挨拶といたします。